

『論語』の「知」について

中国学科 春日井幹三

数年前から、中国の子供たちと一緒に漢語を学んでいる。中国人の老師による「語文」の教科書を使っただけの授業であるから、日本に居ながらにして、50歳若返ったの留学みたいなものである。いずれの国であれ、この年になって小学生になるなどということはありません。頼んで入れてもらった。昨年小学校を卒業して、現在は初中の一年である。

中学に入ると古典の学習が始まる。有名な漢詩は小学2年から習い始めるが、文章は始めてである。最初に学ぶのは、当然(或いは意外にも)『論語』である。「我が国古代の偉大な思想家、教育家」(註1)と紹介しているから、孔子の地位は揺らいでいない。「しーのたまわくー」と日本人が読むところを、「つーゆえー」と声をそろえて声調つきで読むから、なかなかリズムカルで耳に快い。

ところでそのなかに、「知」とは何かについて子路に教える、誰でも知っている有名な句がある。下に原文と訓読を示そう。

子曰：“由、誨女知之乎？知之為知之、不知為不知、是知也。”(《為政》)(註1)

子曰く、由(1)く、女(2)に之を知ることを誨(3)えん乎(か)。之を知るを之を知ると為(4)し、知らざるを知らずと為す。是れ知る也。(註2)

短い句の中に、「知」という字が6回も出てくる。(zhi)という音なのだが、その目的語として3回出てくる「之」も同じ音であることが、言葉遊びの面白さを増している。訓読では日本語の特性から肯定形と否定形を同じ音では表わせないが、せめて「知之」3回は「之を知る」と、「不知」2回は「知らざる」と統一的に読みたいものである。

しかしこの文を書こうと思ったのはそのことではない。老師の後について、小朋友たちと一緒に声をそろえて読んでいた私は、最後にびっくりしてしまったのである。さきほど「知」も「之」も同じ(zhi)だと言ったが、どちらも平らな1声だから、(zhi1)と表わした方がよい。ところが最後の「知」を老師は(zhi4)とすとんと落とす4声で読まれたのである。この「知」は現在なら「智」と書くところで「智慧」という意味だという説明である。

これを、最初の5回の「知」は動詞で、最後のは名詞だと言ってもよいかもしれないが、むしろ、最初の5回の「知」は個々の具体的な「知る」ことを指し、最後の「知」はいわばレベルのちがうメタ関係にある「知るための知」ととらえたい。孔子は子路に学問の秘訣を教えたのである。訓読では最後の「知」も「知る」と動詞として読んでいて、そういう立体的構造は明らかでない。日本人の書いた『論語』の解説書は多いが、最後の「知」は発音が異なる(という説もある)と注釈したものは寡聞にして知らない。気づいた人は教えてください。

日本人は高校の漢文の時間に「知る」として教わり、中国人は初中の語文の時間に「智慧」として教わる。中国人の解釈の方が正しいと言うつもりはないが、両方の教育を受けた人でないと、この微妙な差にはなかなか気づかないだろう。これも異文化体験の一つである。

(註1) 九年義務教育三年制初級中学教科書『語文 第一冊』人民教育出版社 2001年 p125~126。

(註2) 吉川幸次郎『吉川幸次郎全集 第四巻 論語』筑摩書房 昭和44年 p57。

